

フェーロー語形態論：アイスランド語，デンマーク語との比較

著者	八亀 五三男
雑誌名	名古屋学院大学論集 言語・文化篇
巻	27
号	2
ページ	49-64
発行年	2016-03-31
URL	http://doi.org/10.15012/00000660

[論文]

フェーロー語形態論

——アイスランド語，デンマーク語との比較——

八 亀 五三男

名古屋学院大学外国語学部

要 旨

北ゲルマン語に属するフェーロー語は，同じ北ゲルマン語のアイスランド語，デンマーク語と文法体系においてどのような相違があるのだろうか。これらの言語の後置定冠詞，形容詞，動詞，前置詞の格支配を比較・分析することによって，フェーロー語形態論の特徴を明確化することを試みた。

キーワード：北ゲルマン語，文法形態の簡略化，言語の相対的位置，通時態と共時態

Some Aspects of Faroese Morphology

—— A Comparison with Icelandic and Danish ——

Isao YAKAME

Faculty of Foreign Studies
Nagoya Gakuin University

I はじめに

イギリス北部の北大西洋上、ノルウェーとアイスランドの間に浮かぶ島々で、以下のような言語が話されている¹⁾：

A North Germanic language, a member of the West Scandinavian group, spoken by c. 40,000 people in the Faeroe Islands (between Iceland and Shetland). The islands are part of Denmark, but form a self-governing community in which Faeroese now has official status, being taught alongside Danish in schools. Faeroese is closely related to Icelandic. It has had a written form (using the Roman alphabet) only since 1846, but a growing local literature exists.

これはフェーロー語という、北ゲルマン語に属する言語である。

印欧語族のゲルマン語派は東ゲルマン語、西ゲルマン語、北ゲルマン語に分けることができるが、北ゲルマン語はさらに西ノルド語と東ノルド語に分類され、西にはノルウェー語、アイスランド語、そして東にはデンマーク語、スウェーデン語が属する。

しかし、厳密な言語学的分類を行うと、デンマークの自治領であるフェーロー諸島で話されているフェーロー語を西ノルド語に加えなければならない。この言語は他の言語とは弁別される言語的特徴を有している。

フェーロー語は、バイキング時代の9世紀初頭、フェーロー諸島を植民したノルウェー人入植者たちの手によってこの地にもたらされた言語である。その後フェーロー諸島は、14世紀末に成立した、デンマーク女王マルグレーテを中心とするデンマーク＝ノルウェー連合王国に組み込まれることとなった。この王国の首都はデンマークのコペンハーゲンであったため、デンマーク語が教会、行政などで使用される重要な言語となり、以後ノルウェー語、フェーロー語に大きな影響を与えた。フェーロー語は「話されるだけの方言」となり、言語を文字化する行為はすべてデンマーク語でなされた²⁾。

この言語状況に挑戦すべく、V. U. Hammershaimb (1819-1909) は1846年「フェーロー語正書法」を完成させた。これは発音に基づくものではなく、語源(古ノルド語)を重視した正書法であった。この1846年について、フェーロー語研究(特に音韻論)の第一人者であるスウェーデン人のBjörn Hagströmは、以下のように述べている³⁾：

1846 was a decisive year in the history of the Faroese language. In that year the young Faroese theologian, V. U. Hammershaimb, published in Copenhagen a number of Faroese folklore texts in an entirely new orthography, founded not on pronunciation but on etymology.

そして、20世紀初頭の言語状況は、フェーロー語は主に話しことば専用で、文字によるまた口頭による公式の情報伝達方法は依然としてデンマーク語であった。フェーロー語は学校で教え

られることはなく、教会や公的な行事などでも使用されることはなかった。

しかし、1912年と第二次世界大戦の間に劇的な変化が起き、フェーロー語の学習（書く・話す）は徐々に学校教育に取り入れられるようになった。そして、政治的に1948年の地方自治法により、フェーロー語はフェーロー諸島の主言語として正式に認められ、20世紀半ば過ぎには母語で授業が行われるまでに至った⁴⁾。

以下においては、フェーロー語は、他の北ゲルマン語（特にアイスランド語とデンマーク語）と比較すると、どのように異なっているか、またどのような弁別の特徴を有しているかを明確にし、北欧語全体の中でのフェーロー語の言語学的な相対的位置を明らかにしていきたいと思う。

II 定冠詞の位置

北欧語の文法的特徴に「後置定冠詞 (suffixed definite article)」がある。ヨーロッパの言語において、不定冠詞、定冠詞はふつう名詞の前に位置している。例えば、

英語	<u>a</u> book	<u>the</u> book
ドイツ語	<u>ein</u> Buch	<u>das</u> Buch
フランス語	<u>un</u> livre	<u>le</u> livre
イタリア語	<u>un</u> libro	<u>il</u> libro

のように、これらの言語ではbook, Buch（中性名詞）、livre（男性名詞）、libro（男性名詞）の前に冠詞が置かれている。しかし、デンマーク語では、不定冠詞は名詞の前に来るが、定冠詞は、他の言語とは異なり、名詞**bog**（共性名詞）の後に置かれ、

デンマーク語	<u>en</u> bog	<u>bog</u> en
--------	---------------	---------------

となる。この**bog**enは**bog** + **en**の構造になっており、共性名詞に使われる不定冠詞**en**を名詞に後置したことになる（なお、デンマーク語にはもう一つ中性名詞がある）。

それでは、名詞に性（男性名詞、女性名詞、中性名詞）、数（単数、複数）、格（主格、対格、与格、属格）の文法範疇が厳然と存在しているアイスランド語では、どのような複雑さになっているか、それを以下に示したいと思う⁵⁾。

アイスランド語

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主格	-inn	-in	-ið	-nir	-nar	-in

対格	-inn	-ina	-ið	-na	-nar	-in
与格	-num	-inni	-nu	-num	-num	-num
属格	-ins	-innar	-ins	-nna	-nna	-nna

これらの後置定冠詞は、デンマーク語 *bogen* (= *bog-en*) の *-en* のように、例えば「女性名詞の単数主格形には *-in* をつける」などを意味している：*bókin* (= *bók-in*) [the book]。アイスランド語の名詞 (*bókin*) はデンマーク語の名詞 (*bogen*) とは異なり、性、数、格に応じて変化する。

そして、次に示すフェーロー語の後置定冠詞もアイスランド語とほぼ同じ形態を持っており、

フェーロー語

	単数			複数		
	男性	女性	中性	男性	女性	中性
主格	-in	-in	-ið	-nir	-nar	-ini
対格	-in	-ina	-ið	-nir	-nar	-ini
与格	-num	-ini	-num	-num	-num	-num
属格	-ins	-inar	-ins	-nna	-nna	-nna

となっている⁶⁾：*bókin* (女性単数主格)。

M. P. Barnes は、「属格は書きことばにおいても、限られた前置詞句を除いては（特に女性形は）ほとんど使われることはない。話しことばでは、男性複数の主格と対格は同一化する傾向にあり、主格の方を好んで用いる」としている⁷⁾。なお、後半の「男性名詞複数では対格と主格は同化する」という指摘は、アイスランド語の男性複数対格の *-na* が、フェーロー語では主格の *-nir* と同形になっている現象のことである。さらに、中性単数与格では、アイスランド語の *-nu* が *-num* と、男性単数与格と同形になっている点にも注意をしたい。

このように、アイスランド語ではすべて24の文法形式が平等に機能しているのに対して、フェーロー語では形態の簡略化、単純化の方向にあるのがわかる。

それでは次に、後置定冠詞が実際に名詞の変化形にどのように後続するかを観察するために、まずフェーロー語の名詞変化の具体例を示したいと思う。名詞には、アイスランド語と同じように男性名詞、女性名詞、中性名詞があるが、その中の男性名詞を観察することにする⁸⁾。

フェーロー語 *bátur* [boat]

	単数	複数
主格	<i>bátur</i>	<i>bátar</i>
対格	<i>bát</i>	<i>bátar</i>
与格	<i>báti</i>	<i>bátum</i>
属格	<i>báts</i>	<i>báta</i>

W. B. Lockwood は、後置定冠詞に関する M. P. Barnes の指摘と同様に、名詞に関しても明確に

The use of genitive is rather limited.

と述べており、さらに属格は限られた前置詞句には用いられるが、話しことばにおいてはその使用が非常にまれである、と指摘している。また、

Forms in brackets may occasionally be found in writing, but do not occur in the spoken language.

と説明し、複数属格の *báta* に () をつけている⁹⁾。また、その他の名詞 *fundur* [meeting], *tími* [hour], *hurð* [door], *bygd* [village], *bók* [book], *genta* [girl] などでは、属格の単数・複数両方に () をつけている¹⁰⁾。つまり、これは属格の使用頻度が低いことを意味している。もし使用されるとしても、それは書きことばにおいてである¹¹⁾。

それでは、属格を使わないとどのような方法でそれを補填するのか、フェーロー語では代わりに prepositional phrase [circumlocution], 少し回りくどい前置詞句表現を用いる¹²⁾：

bilurin hjá stjóranum

bilurin は the car [単数主格], *stjóranum* は the director [単数与格], そして *hjá* は (「V 前置詞の格支配」で論ずるが) 名詞の与格を支配する前置詞である (意味は「～のところで」)。すなわち、*hjá stjóranum* が前置詞句で、*bilurin hjá stjóranum* 全体で “the director’s car” の意味になる。しかし、格範疇を持つ言語すべてについて言えることなのだが、文中での機能は主格 [主語] であることが既に決まっていることに注目すべきである。英語の “the director’s car” は、文中に入れないと、これだけでは主語なのか目的語なのか、その統語的機能はわからない。

また、後置定冠詞のところでも述べたように、複数主格と対格が同形であることにも注目すべきである。アイスランド語では複数主格・対格が *bátar/báta* と異なっているのに対して、フェーロー語では *bátar/bátar* と対格が主格に同化している。

ここで重要点を再度指摘しておきたい。*bátur* は英語では boat なのであるが、上で見たように、フェーロー語には文法的格範疇が存在するのに対して英語にはそれがない。すなわち、厳密には *bátur* は「ボート」(この日本語に数・格は示されていない) という意味ではなく、これだけで数・格の文法概念を内蔵した「一艘のボートが」という意味である。別の言い方をすれば、独立した一つの単語に統語論的な機能が既に備わっていることになる。

そして、フェーロー語の *bátur* の後置定冠詞形は以下のようなになる¹³⁾：

	単数	複数
主格	bá <u>tur</u> <u>in</u>	bátar <u>nir</u>
対格	bát <u>in</u>	bátar <u>nar</u>
与格	bát <u>in</u> <u>um</u>	bátun <u>um</u>
属格	bát <u>sins</u>	bát <u>anna</u>

上述したように、この中で例えば *báturin* が意味することは、男性名詞主格単数 *bátur* に、この文法特徴に一致する後置定冠詞 *-in* が後ろから接合された (*bátur-in*) ということである。

なお、W. B. Lockwood は属格単数・複数の両方に () をつけている。また、複数与格の *bátum* は、後置定冠詞形では *bátunum* (< *bátu(m)num*) のように *-m* が脱落する¹⁴⁾。

それでは、次にアイスランド語、フェーロー語、デンマーク語を比較してみたいと思う。

この *bátur* はアイスランド語でも全く同じ形式である。ただ、後置定冠詞 (男性名詞単数主格) は *-inn* であるので、「その一艘のボートは」は

アイスランド語	bátur <u>inn</u>
フェーロー語	bátur <u>in</u>

となり、さらに

デンマーク語	båd <u>en</u>
--------	---------------

となる。語形で見るとフェーロー語は限りなくアイスランド語に近いと考えることができるが、後置定冠詞は *inn* → *-in* と、*n* が一つ脱落している。デンマーク語では、英語と同じように名詞の格が消失している (ただ、*en mands søn* [= a man's son] のように属格の名残は存在するのだが、文法範疇としての格体系は存在しない)、後置定冠詞は共性単数と中性単数の *-en* と *-et* のみであり、*båd* が共性名詞であるために、*båd* に *-en* が付加されている (複数形には *-ne* が付加される: *bådene* (= *både-ne*) [the boats])。

ちなみに、アイスランド語の直接の先祖である古ノルド語は *bátrinn* である。ただ、*bátrinn* - *báturinn* は単に正書法上の相違である (*u* の有無)。

III 形容詞の変化

フェーロー語の形容詞は2種類に変化する。それは強変化と弱変化であって、強変化は不定冠詞、無冠詞の時に用いられ、定冠詞、指示代名詞と共起する場合は弱変化を起こす¹⁵⁾。

それでは、男性名詞・強変化の具体例を観察したいと思う。ただ、他言語との相違がわかりやすいように、アイスランド語、フェーロー語、デンマーク語、英語の順に提示する。英語の

heavy boat(s)に当たる全変化形である。

アイスランド語

	単数	複数
主格	þungur bátur	þungir bátar
対格	þungan bát	þunga báta
与格	þungum báti	þungum bátum
属格	þungs báts	þungra báta

フェーロー語

主格	tungur bátur	tungir bátar
対格	tungan bát	tungar bátar
与格	tungum báti	tungum bátum
属格	tungs báts	tungra báta

デンマーク語

(主)	tung båd	tunge både	
(対)	tung båd	tunge både	
(与)	(til) tung båd	(til) tunge både	(til = 英語 to)
(属)	(af) tung båd	(af) tunge både	(af = 英語 of)

英語

(主)	heavy boat	heavy boats
(対)	heavy boat	heavy boats
(与)	(to) heavy boat	(to) heavy boats
(属)	(of) heavy boat	(of) heavy boats

アイスランド語は、古ノルド語の直接の子孫なので、フェーロー語よりも古い形を残している。後置定冠詞のところでは指摘したように、複数対格形がアイスランド語 þunga báta → フェーロー語 tungar bátar に変化している、すなわち名詞は主格と同形になり、形容詞には -r が付加されより主格に近づいたと言える¹⁶⁾。

また、何度も指摘しているように、フェーロー語は属格が使用されない傾向が強い、はもう一度確認しておきたい。

デンマーク語は、単数・複数で形容詞と名詞の形が異なっている (tung/tunge, båd/både)、つまり異なった形態が4種類存在することになる。それに対して、英語では、heavy, boat/boats と3種類しかない、名詞の単数・複数の違いだけである。形容詞は heavy しかない、英語はデンマー

ク語よりもさらに簡略化している。

アイスランド語、フェーロー語ではこれ以外に女性名詞、中性名詞は別の変化をすることは注意しておく必要がある。すなわち、単純計算で、形容詞には24種類(8×3)の変化形が存在することになる。

また、上記の形容詞は強変化であるが、形容詞が定冠詞類と共起する時は下記のように弱変化を行い(男性名詞の場合)、

	単数	複数
主格	tungi	tungu
対格	tunga	tungu
与格	tunga	tungu
属格	tunga	tungu

さらに数が増えることになる。弱変化は、アイスランド語とフェーロー語では同じ変化形であるが、デンマーク語では単数・複数共通のtunge一つとなり、もちろんアイスランド語のような文法範疇としての格変化は存在しない。

IV 動詞の活用

ゲルマン語の動詞活用の特徴は、強変化動詞と弱変化動詞が存在することである。強変化動詞は動詞語幹の母音を変化させること(母音交替Ablaut)により過去形、過去分詞形を作る(英語の不規則変化動詞に相当する)のに対して、弱変化動詞は動詞語幹に歯音dentalを付加することにより両形を形成する(英語の規則変化動詞に相当する)。

それでは、強変化動詞taka [to take]の不定詞形、現在形、過去形を、古ノルド語(→古ノ語)、アイスランド語(→ア語)、フェーロー語(→フェ語)、デンマーク語(→デ語)の順に列挙し、それぞれの形態を比較することにより、フェーロー語動詞形態論の特徴を明確にしたいと思う。

		古ノ語	ア語	フェ語	デ語	
不定詞		taka	taka	taka	tage	
現在	単数	1人称	tek	tek	taki	tager
		2人称	tekr	tekur	tekur	tager
		3人称	tekr	tekur	tekur	tager
	複数	1人称	tøkum	tökum	taka	tager
		2人称	takið	takið	taka	tager
		3人称	taka	taka	taka	tager

過去	単数	1人称	tók	tók	tók	tog
		2人称	tókt	tókst	tókst	tog
		3人称	tók	tók	tók	tog
複数	1人称	tókum	tókum	tóku	tog	
		2人称	tókuð	tókuð	tóku	tog
		3人称	tóku	tóku	tóku	tog

アイスランド語の活用形は古ノルド語とほぼ同じであるが、フェーロー語ではかなり簡略化されているのがよくわかる。例えば、現在複数1~3人称が全部同じ形 *taka* になっている、過去では *tók* に統一されている。現在、過去ともに、3人称の形が1, 2人称にとってかわった結果である。アイスランド語ではそれぞれの数において、3形とも異なっている、現在 *tökum*, *takið*, *taka*, 過去 *tókum*, *tókuð*, *tóku*。なお、現在複数1人称の *tökum* の *ö* は *taka* の *a* が複数1人称語尾 *-um* の影響を受けて、*u-Umlaut* を起こした結果である。現在、過去ともアイスランド語の異なる5つの形態に対して、フェーロー語の異なる形態は3つに減少している。

デンマーク語の現在形は、単数・複数、全人称の形態において、不定詞に *-r* を付加すればよい。過去形も、すべて *tog* となっていて、フェーロー語よりも極端に簡略化が進んでいる。

重要点は、アイスランド語（フェーロー語は簡略化している）では、名詞と同じように動詞活用語尾の形式を見ると、人称・数が一目瞭然であることである。文に投入された時の文法的役割を考慮することなく、その活用形の形態論的特徴のみで文中での機能をすべて知ることができる。

上記の動詞 *taka* は強変化動詞（語幹の母音が変化）であるが、弱変化動詞にも同様の現象が観察される。*kalla* [to call] の変化を見てみよう。前述したように、弱変化動詞とは、歯音 *dental* を付加することによって過去、過去分詞を形成する種類の動詞である（英語の規則変化動詞）。

		古ノ語	ア語	フェ語	デ語
不定詞		<i>kalla</i>	<i>kalla</i>	<i>kalla</i>	<i>kalde</i>
現在 単数	1人称	<i>kalla</i>	<i>kalla</i>	<i>kalli</i>	<i>kalder</i>
	2人称	<i>kallar</i>	<i>kallar</i>	<i>kallar</i>	<i>kalder</i>
	3人称	<i>kallar</i>	<i>kallar</i>	<i>kallar</i>	<i>kalder</i>
複数	1人称	<i>køllum</i>	<i>köllum</i>	<i>kalla</i>	<i>kalder</i>
	2人称	<i>kallið</i>	<i>kallið</i>	<i>kalla</i>	<i>kalder</i>
	3人称	<i>kalla</i>	<i>kalla</i>	<i>kalla</i>	<i>kalder</i>

過去 単数	1人称	kallaða	kallaði	kallaði	kaldte
	2人称	kallaðir	kallaðir	kallaði	kaldte
	3人称	kallaði	kallaði	kallaði	kaldte
複数	1人称	kølluðum	kölluðum	kallaðu	kaldte
	2人称	kølluðuð	kölluðuð	kallaðu	kaldte
	3人称	kølluðu	kölluðu	kallaðu	kaldte

強変化動詞のところでも説明したように、アイスランド語では現在複数1人称そして過去複数1~3人称でaがu-Umlautを起こしている(a→ö)。また、フェーロー語では、現在・過去ともに複数において3人称形が1・2人称に使用されており(現在 *kalla*, 過去 *kallaðu*)、強変化動詞 *taka* と同じように、複数が劇的に単純化している。また、過去単数も3人称の形が2人称に使われていると考えられる(*kallaði*)。現在・過去ともアイスランド語は異なる5の形態に対して、フェーロー語では異なる形態は現在は3つ、過去は2つに減っている。

デンマーク語では、現在は *kalder* で統一、過去は *kaldte* で統一(*kalde* の語幹 *kald* + 歯音 [te] の構成) されている。

ただ、デンマーク語の綴りについて一点指摘しておくべきことがある。他の3つの言語は -ll- であるのに、デンマーク語だけは -ld- となっていることに注意しなければならない。これについては、スウェーデンの言語学者 E. Wessén が以下のように記述している¹⁷⁾：

ld och *nd* assimileras till *ll*, *nn* (*holle*, *binne*), men i stavningen bibehålles *ld*, *nd* och införes även för urspr. *ll*, *nn* (*falde*, *fінде* o. s. v.).

すなわち、もともとの綴りが *ld* のデンマーク語の単語(アイスランド語 *halda* [to hold]) は、発音は *ll* と同化するのだが、綴りはそのまま維持する(デンマーク語 *holde* : [d] は発音しない)。もともとの綴りが *ll* のデンマーク語の単語(アイスランド語 *falla* [to fall]) も、上記の変更に合わせて綴りを *ld* に変えた(デンマーク語 *falde*)。綴りは *ld* となっているが、もともと *ll* なのでもちろん [d] は発音されない¹⁸⁾。

V 前置詞の格支配

「II 定冠詞の位置」において、フェーロー語表現 *bilurin hjá stjóranum* の *hjá* は与格を支配する前置詞であると説明した。*stjóranum* は *stjóra* + *num* と分析でき、*stjóra* は男性名詞 *stjóri* [director] の単数与格形、*-num* は後置定冠詞の男性単数与格形である。

名詞に格範疇を有する言語においては、前置詞は格支配を行う。格範疇が存在しない英語においては、*father* という形は前置詞 *for* の後でも *with* の後でも全く同形である。しかし、格変化を

行うラテン語やドイツ語では、前置詞に応じて名詞が格変化する。アイスランド語もまた然りである。それぞれの前置詞がどの格を後に従えるかは文法規則で決まっている。

ラテン語

ad urbem [to the city] (urbem は urbs の対格)
sine dubitatione [without hesitation] (dubitatione は dubitatio の奪格)

ドイツ語

trotz des Regens [despite the rain] (Regens は Regen の属格 [2格])
ohne Arbeit [without job] (Arbeit は Arbeit の対格 [4格])

アイスランド語

frá Íslandi [from Iceland] (Íslandi は Ísland の与格)
án bíls [without a car] (bíls は bíl の属格)

デンマーク語も英語と同様格範疇を持たないので（ただし、属格の名残は存在する）、英語と同じような事情になっている。フェーロー語は、この点に関してアイスランド語に近く、前置詞は格支配をする、しかし属格は消失しつつあり、非常に長期的観点から言えば言語変化はデンマーク語に向かっているのではなかろうか。

フェーロー語では、以下のようにになっている¹⁹⁾：

gjøgnum vegginn [through the wall] (vegginn は veggur の対格)
frá húsum [from home] (húsum は hús の与格)

さらに、W. B. Lockwood は、（それほど広範囲にわたらないが）話しことばでは地名との関連で、前置詞 millum は

millum Grønlands og Íslands [between Greenland and Iceland]
(Grønlands, Íslands は Grønland, Ísland の属格)

のように属格を使用することはあるが、一般的には

millum Grønland og Ísland [between Greenland and Iceland]
(Grønland, Ísland は Grønland, Ísland の対格)

のように対格を使用すると指摘しており、属格形の使用頻度が減ることになる。「II 定冠詞の

位置], 「Ⅲ 形容詞の変化」の場合と同じように, 属格の使用が制限されている。

デンマーク語にはもはや文法範疇としての格体系がないので, 前置詞の格支配は存在しないのだが, 属格, 与格の名残を慣用表現的な定型前置詞句に見ることができる (“Relics of old inflexions after certain prepositions”²⁰⁾。

at have i sinde [to intend]
nu til dags [nowadays]
at komme af dage [to die]
indenbys [local]
at gå ~ til hænde [to assist (somebody)]
at være på færde [to be on the go]

これはほんの一部だが, 言語が通時的に変化を行うという証拠を現実に目の当たりにできる重要な言語事実である。言い換えれば, 通時の変化が共時的に姿を変えたと言える。

VI 結語

これまで, アイスランド語, デンマーク語との比較において, フェーロー語の形態論に関していくつかの特徴を指摘してきた。定冠詞, 名詞などにおいては, アイスランド語では4格とも明確に存在しているにもかかわらず, フェーロー語では部分的な形式の簡略化(同化), そして属格が使われなくなる傾向にあることを観察した。デンマーク語では, それらが極端に簡略化してしまっている。

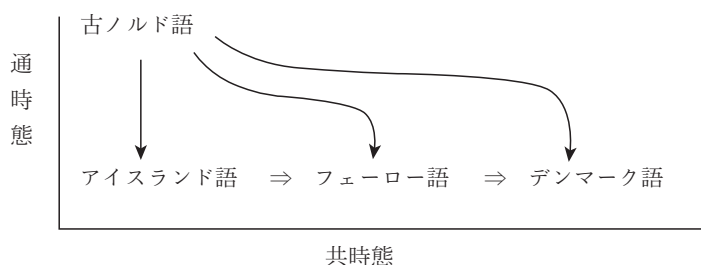
また, 動詞に関してもアイスランド語, フェーロー語, デンマーク語の順に, その活用が単純になっていることが明確になった。例えば, アイスランド語に較べてフェーロー語では特に複数形が劇的に変化した。

それ故, これら3つの言語を総体的に捉えると,

アイスランド語 ⇒ フェーロー語 ⇒ デンマーク語

の順で文法形式(言語形態)が簡略化していると言える。

古ノルド語も考慮して, 敢えてこれら4言語の通時・共時関係を図示すると以下ようになる:



古ノルド語直接の子孫にあたるアイスランド語は、古ノルド語の文法体系をほぼそのまま継承し現在に至っている。それに対して、フェーロー語はアイスランド語に極めて近い形態を有しているにも関わらず、簡略化の傾向を持つと考えられる。そして、デンマーク語はその簡略化がさらに進み、アイスランド語に見られるような文法の複雑さはもはや消滅し、現在のデンマーク語文法にその姿を変えたと言える。その結果、古ノルド語から遠く離れてしまった。

このように、フェーロー語はアイスランド語 ⇒ デンマーク語の通時的変化の中間的位置・中間過程にあると言え、フェーロー語の相対的位置関係は明確になったのではなかろうか。

ここでさらなる言語比較を試みたいのだが、もう一度「III 形容詞の変化」のtung [heavy]を例にとり、上図の一番右に位置するデンマーク語と英語を較べることにする。デンマーク語には英語にはない性の文法範疇が存在し、それは共性名詞と中性名詞である。båd [boat]は共性名詞、bord [table]は中性名詞で、これにheavyに相当する形容詞tungをつけると、単数、複数で以下のようなになる：

単数	複数
tung båd	tunge både
heavy boat	heavy boats
tungt bord	tunge borde
heavy table	heavy tables

形容詞の語形変化に注目すると、英語はheavyだけであるのに対して、デンマーク語にはtung(共性単数), tungt(中性単数), tunge(共性中性複数)と3種の異なる形式が存在する。これは、英語の文法形式の大きな簡略化を意味している。

そこで、北歐語のような北ゲルマン語ではないのだが、西ゲルマン語としてゲルマン語派に属する英語もこの図の中に組み入れると、以下のようにデンマーク語よりさらに右に来ることになるであろう：

アイスランド語 ⇒ フェーロー語 ⇒ デンマーク語 ⇒ 英語

一つの言語の真の構造を知るためには、他の同系統の言語とその文法体系を比較し、相対的な位置関係を確定することが必須の条件だと言える。その言語の絶対的な共時的構造を見極めることも重要だが、共時的・通時的言語比較により言語の本質分析の客観性が格段に増すことは確実である。

最後に、Joan Bybeeが*Language Change* (p. 11) の中で指摘している重要な記述に注目したい：

Understanding language change helps us to understand synchronic states, their structure, and the variation that is not found in them.

と述べており、共時的な言語状況の正確な観察における、通時的言語変化理解の重要性を強調している。また、同ページで

... the current situation is best understood in the context of past developments as well as developments in other languages.

とも述べている。このキーワードは、current situationとpast developmentsであり、通時的な言語変化を十分観察することによってのみ、またそれを他言語と比較することによってのみ、現在の言語実態が正しく分析できる主張が最重要のポイントである。

past developments (過去)



current situations (現在)

のように、past developmentsがcurrent situationという結果を生んだことになる。

共時的な言語事実をありのままに記述することは極めて重要であるのだが、通時的な言語変化の視点を組み入れ他の言語と比較することによってのみ、現在の本質的な言語体系がより明確に浮かび上がってくる。

いかなる言語も通時態、共時態二つの側面を持ち、その両面からの分析が可能である。共時的言語事実は、通時変化の、ある特定の時期における一側面を示しているにすぎない。

注

- 1) D. Crystal. *An Encyclopedic Dictionary* p. 132.
- 2) B. Hagström “Research in Faroese language ...” p. 102.
- 3) B. Hagström “The Faroese Language” p. 35.
- 4) M. P. Barnes “The standard lanaguages and ...” p. 1574.
- 5) B. Kress. *Isländische Grammatik*. p. 82.
- 6) 表の作成には、M. P. Barnesなどの論文を参考にした。アイスランド語との相違をわかりやすくするために()は取ってあるが、「属格はあまり使われない」傾向があるので、フェーロー語形態論を扱った論文、研究書では変化表の中によく()がつけられている。
- 7) “Faroese” p. 202: Table 7.7 The suffixed definite article の変化表の Note の箇所。
- 8) W. B. Lockwood. *Introduction*. p. 28.
- 9) W. B. Lockwood. *Introduction*. p. 28:
The use of the genitive is rather limited. As a syntactical case it occurs in the spoken language only in a very few cases, but it is found more widely in certain prepositional phrases. Still most nouns do not exist as independent words in the genitive at all, ...
- 10) W. B. Lockwood. *Introduction*. pp. 30–35.
- 11) 例えば、M. P. Barnes は “Many nouns have genitive forms only in the written language;” と指摘している (“Faroese” p. 198)。
- 12) M. P. Barnes “The standard lanaguages and ...” p. 1581;
さらに、彼は “Faroese” で、 “the genitive has been largely superseded by circumlocutions” と指摘している (p. 198)。
- 13) W. B. Lockwood. *Introduction*. pp. 30–5.
- 14) M. P. Barnes “Faroese” p. 202.
- 15) 形容詞の強変化については、W. B. Lockwood. *Introduction*. p. 46 参照。
- 16) 名詞に関して、M. P. Barnes は次のように述べている：
... nominative and accusative forms have become identical everywhere ...
 (“Faroese” p. 198)
- 17) *De Nordiska Språken*. pp. 70–1.
- 18) これについては、デンマークの言語学者 A. Hansen も、 “oprindeligt *ld, nd* falddt sammen med *ll, nn, ...*” と説明している (*Moderne Dansk 1*. p. 357)。
- 19) W. B. Lockwood. *Introduction*. p. 90 & p. 93.
- 20) W. G. Jones & K. Gade. *Danish. A Grammar*. p. 72.

参考文献

- Árnason, Kristján. *The Phonology of Icelandic and Faroese* (Oxford: Oxford University Press, 2011)
- Barnes, Michael P. “Faroese” in Ekkehard König & Johan van der Auwera (eds.) *The Germanic Languages* (London/New York: Routledge, 1994)
- “The standard lanaguages and their systems in the 20th century II: Faroese” in Oskar Bandle (ed.) *The*

- Nordic Languages Vol. 2.* (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2005)
- Bybee, Joan. *Language Change* (Cambridge: Cambridge University Press, 2015)
- Crystal, David. *An Encyclopedic Dictionary of Language and Languages* (London: Blackwell, 1992)
- Hagström, Björn. *Ändelsevokalerna i färöiska—En fonetisk-fonologisk studie* (Stockholm: Almqvist & Wiksell, 1967)
- “The Faroese Language: Origin. Development. Status” *Faroe Isles Review Vol. 2, No 1* (Tórshavn: Bókagarður, 1977)
- “Research in Faroese language history 1850–1950. An overview” in Oskar Bandle (ed.) *The Nordic Languages Vol. 1.* (Berlin/New York: Walter de Gruyter, 2002)
- Hansen, Aage. *Moderne Dansk 1* (København; Grafisk Forlag, 1967)
- Haugen, Einar. *The Scandinavian Languages: An Introduction to their History* (London: Faber and Faber, 1976)
- Jacobsen, M. A. & Chr. Matras. *Føroysk-Donsk Orðabók* (Tórshavn: Føroya Fróðskaparfelag, 1961)
- Jones, W. Glyn & Kirsten Gade. *Danish. A Grammar* (Copenhagen: Gyldendal, 1981)
- Kress, Bruno. *Isländische Grammatik* (Leipzig: VEB Verlag, 1982)
- Lockwood, W. B. *An Introduction to Modern Faeroese* (Tórshavn: Føroya Skúlabókgarunnur, 1977)
- Wessén, Elias. *De Nordiska Språken* (Stockholm/Göteborg/Uppsala: Almqvist & Wiksell, 1960)